

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：空の青さを知る人よ

今回のテーマ

きょうだいトラウマとエディプスコンプレックス

はじめに

「空の青さを知る人よ」は、両親の突然の死という喪失体験を経て、年の離れた姉妹であるあおいとあかねの関係が、本来の姉妹関係から親子関係（保護者と被保護者）へと変容していく物語である。この過程で生じた姉妹間の情緒的葛藤は抑圧されたまま、あおいは成長を続ける。

高校3年生となり成人への移行期を迎えたあおいの中で、長年抑圧されてきた情緒的葛藤が再浮上する。この変化の過程で生じる心理的葛藤、特にあおいの内面に芽生えるあかねへの競争心、劣等感、そして罪悪感、まさにきょうだいトラウマの典型的な症状として理解することができる。そこにあかねの元恋人である慎之介が帰郷し、今まで置き去りにしてきた様々な感情と向き合うことになる。

今回、きょうだいトラウマとエディプスコンプレックスという概念を通して本作品で描かれている、きょうだい関係の複雑さと、そこに生じる喪失からの離脱・再建の過程について考察していきたい。

今回のテーマ

I. きょうだいトラウマの理論

II. あおいの発達過程における退行と再挑戦

III. 「しんの」の象徴的意味とエディプスコンプレックス

IV. 慎之介の喪失と都市での挫折

V. 三者それぞれの「再生」の物語

VI. まとめと「井の中の蛙」の多層的解釈

I. きょうだいトラウマの理論的背景

1) ジュリエット・ミッチェルの「きょうだいトラウマ」

ジュリエット・ミッチェルの「きょうだいトラウマ」は、きょうだい関係に固有の心理的構

造を明らかにした概念である。その中核には三つの特徴がある。第一に、きょうだいは「同じ家族の一員」でありながら「異なる個体」という同等性と差異の矛盾を内包し、この矛盾が根本的な不安定さを生む。第二に、心理的に「消去される」「愛情を失う」という排除の恐怖が存在する。これは物理的な死ではなく、関係性における存在価値の否定への深い不安である。第三に、愛する対象との競争という矛盾した感情の共存である。

ミッチェルはこの理解のため「母の法」概念を提唱した。ラカンの「父の法」が父-子の垂直的關係における言語と象徴秩序への参入を表すのに対し、「母の法」はより原初的な禁止を含む。新しいきょうだいが生まると、幼い子どもは排除の恐怖から殺意を抱くが、母はこれを禁止する。この禁止が「母の法」の核心であり、限られた母の愛情を分かち合う水平的な社会關係の基盤となる。

「母の法」には明確な階層や言語化された規則はなく、共存と妥協、嫉妬と連帯が混在する言語化以前の次元である。きょうだいトラウマは、こうした水平的關係における平等と差異の葛藤から生じ、垂直的なエディプス的關係とは異なる心理的課題を提示している。

きょうだいトラウマが最も顕著に生じるのは、**2歳から4歳頃の幼児期**といわれる。

ミッチェルの枠組みで整理すると：

時期	従来の理解	ミッチェルの理解	臨床的意味
生後6-8ヶ月	母子一体の時期	妄想-分裂/抑うつポジション	母子關係
2歳前後	再接近期・分離個体化	きょうだいトラウマ	母の法、水平軸
4-5歳	エディプス期	エディプス期	父の法、垂直軸

アニメでの幼い時のあおいは4歳であり、きょうだいトラウマの要素（あかねへの羨望や競争心）が存在していたと考えられる。

また、きょうだいトラウマは一度だけ起きるものではなく、各発達段階（児童期、思春期、青年期）で異なる形で再活性化する可能性がある。特に青年期（とりわけ15歳から18歳）

には、アイデンティティ形成と絡んで再び顕在化することがある。

そしてこの物語は、両親の死によって抑圧されてきたきょうだいトラウマが、あおいの自立・独立を契機に再び湧き起こり、その情緒的課題を巡って展開される物語である。

2) あおいとあかねの関係性の変遷

相生あおいは本作の主人公で、あかねの妹。学校での交友関係は乏しく、一人でベースの練習に明け暮れている。東京でのバンド活動を夢見ているが、その背景には秩父での息苦しさからの逃避と万能空想がある。

一方、姉の相生あかねは、両親の事故死により慎之介との東京行きを断念し、地元の市役所に就職してあおいを育てている。気立てが良く地域との交流も積極的で、完璧な人格を持つが、それゆえにあおいの心理的葛藤を助長している。

幼児期、4歳のあおいはあかねに対し、対抗心や羨望を抱いていた。慎之介からベースを教わり「でっかくなったら、うちのベースな」と言われたことで、「姉には届かない場所でバンドメンバーになれる」という幻想を持ち、あかね・慎之介・あおいのエディプス的三角関係が潜在的に存在していた。

両親の死後、あおいはあかねとの関係は母子的な二者関係となり、共に慎之介への感情を抑圧したと考えられる。現在、あかねと同年齢になり、抑圧してきたエディプス葛藤が再燃している。完璧な姉と「同じ大人の女性」として比較されることで競争心と劣等感が浮上するが、この葛藤を否認するように刹那的な上京を考えている。秩父での息苦しさは内面的抑圧の投影であり、その背景には躁的防衛の心性が存在している。

3) 「殺される恐怖」の現れ

あおいが感じる「あかねと比較して劣っている」という認識は、心理的な「排除される恐怖」として現れている。これは関係性の中で自分が無価値になり、愛情を失う恐怖である。その根源は両親を失った直後にまで遡る。この時期は **通常のきょうだいトラウマが形成される最も感受性の高い時期**に加え、**両親の死という圧倒的な喪失体験**が重なった時期でもある。当時あかねは文字通り生存を支える唯一の存在であり、見捨てられれば絶対的な孤独に直面するという不安が無意識に刻まれた。現在、高校生として「対等な大人の女性」へと変化する中で、この古い恐怖が再活性化している。あかねの完璧さと自分の未熟さを比較し、「やがて愛情を失うのではないか」という不安が頭をもたげる。さらに、自分があかねの人生を狂わせたという罪悪感が、排除される恐怖を一層深刻なものにしている。

II. あおいの発達過程における退行と再挑戦

1) 適応的退行の意味

前回、高校卒業直後のお堂の前であかねとしんのが話し合っていたところに、幼いあおいが割って入っていったシーンを取り上げた。両親を失った、その当時の幼いあおいは、エディプス葛藤に直面する心理的準備ができていなかった。突然の喪失によって支えを失ったあおいにとって、あかねとの二者関係への退行は生存戦略としての適応であった。複雑な三角関係や競争心といった心理的課題よりも、基本的な安全と愛情の確保が最優先となったのである。これによりあおいのエディプス的な競争や葛藤は、より成熟した段階で再び取り組むべき課題として一時的に棚上げされた。このような適応的退行は、圧倒的な喪失体験に対する自然で合理的な防衛機制であったと言える。

2) 抑圧された感情の蓄積

しかし、この退行的解決は同時に様々な心理的代償を伴っていた。まず、慎之介という父親的存在への憧れが抑圧されることとなった。幼いあおいにとって慎之介は理想的な男性像であったが、あかねとの安全な関係を維持するために、この感情は意識から排除される必要があったのである。

また、あかねとの競争心についても否認が働いた。本来であれば自然に生じるであろう姉への対抗意識や嫉妬心は、生存に必要な保護関係を脅かす危険な感情として、あおいの心の奥底に押し込められた。

一方で、あおいはあかねに対して退行的で子供じみた反抗的な態度を取るようになった。直接的な対立は避けながらも、わがままを言ったり、素直でない態度を示すことで、抑圧された感情の一部を表現していたのである。これは、安全な依存関係の中で許される範囲での反抗であり、あおいなりの心理的バランスの取り方であった。

これらの抑圧された感情は、完全に消失したわけではなく、あおいの音楽への情熱という形で昇華されながらも、内面に蓄積され続けていたと考えられる。音楽という創造的な活動を通じて、言葉にできない複雑な感情を表現し、心理的なバランスを保とうとしていたのである。

3) 高校2年生という転換点

大学進学を控えたあおいは、初めてあかねと「同じ大人の女性」として比較される立場に立つこととなった。この転換期において、あおいの自己認識は複雑で矛盾したものとなっていく。

あおいから見たあかねは、完璧で地域に愛され、常に自制心を保つ理想的な大人の女性である。一方で自分自身については、直情的で人との関わりが苦手な未熟な存在として認識している。さらに、自分がいることであかねの人生設計を壊してしまったという深い負い目も抱えており、この罪悪感があおいの自己評価をより一層低下させている。

このような自己認識の背景には、複雑な内面の葛藤が存在している。あかねへの深い感謝の気持ちと、同時に芽生える競争心が混在し、あおいの心を混乱させている。また、大人として自立したいという憧れがある一方で、あかねに依存していることの安心感も手放し難く、この相反する感情があおいを苦しめている。

これらの葛藤から逃れるように、あおいは上京への逃避願望を強めている。秩父という閉鎖的な環境から離れ、東京という理想化された場所で新しい自分になりたいという思いは、現実の複雑な感情と向き合うことを避けたいという心理的防衛の現れでもある。

そのような中で町おこしのために来た、大物演歌歌手の新渡戸団吉と共にバックバンドのギターとして金室慎之介が現れ、あおいそしてあかねの抑圧してきた思いが再び持ち上がってくる。

バックバンドの慎之介は、以前のようなキラキラとして生き生きとした青年ではなく、何か物憂げで様々なジレンマを抱えた一人の大人の男性になっていた。そんな現在の慎之介の姿に、あおいとあかねはそれぞれ失望にも似た複雑な感情を抱くのである。それと同時に高校生の姿をした生き霊ともいべき「しんの」があおいが練習していた御堂に姿をみせるのである。

Ⅲ. 「しんの」の象徴的意味と三角関係の再構築

1) 「しんの」の心理学的機能

若き日の慎之介「しんの」の出現は、あおいにとって重要な心理学的意義を持っている。

まず、「しんの」は父親的存在の復活を意味している。彼はあおいが幼い頃に心理的に排除せざるを得なかった憧れの対象であり、長年抑圧されてきた父親への愛情が再び表面化する契機となった。同時に、あおいにとっては自立と成長に向き合う象徴的存在でもある。

精神分析的な三角関係の構造（エディプスコンプレックス）で考えると：

- しんの：父的存在（憧れの対象、競争の対象）
- あかね：母的存在（愛情と保護の源泉、同時に競争相手）
- あおい：子どもの存在（エディプス葛藤を体験する主体）

なぜなら「しんの」は、あおいが長年回避してきたエディプス葛藤の核心部分を体現しており、真の心理的成熟を遂げるために避けて通れない課題そのものだからである。

また、「しんの」はあおいにとって安全な挑戦の場を提供している。現実の大人になった慎之介ではなく、過去から現れた「安全な」存在であるからこそ、あおいは心理的リスクを抑えながら感情を探求することができる。これは、一度は回避したエディプス葛藤への再挑戦の機会を与えてくれるものでもある。

さらに、「しんの」への感情は、あおいが「保護される妹」から「大人の女性として愛する対象を持つ」という新たな発達段階への移行を象徴している。この感情を受け入れ、向き合うことで、あおいはこれまで抑圧してきたあかねへの競争心、嫉妬心、愛情といった複雑な感情（つまりコンプレックス）を認め、より統合された存在へと成長していく。そして重要なのは、「しんの」を媒介とすることで、あかねとの関係を維持しながらこの成長過程を経験できることである。